

州国の興亡も総て天地を舞台にした一コマだったのだ。

## 引揚者の体験記

山形県 高橋 三男

私は昭和九年四月、友人である当時満州国奉天市公署科長さんのご配慮により、かねて希望いたしておりました大陸満州に渡ることができました。当時はまだ治安状況も安定しない時期でしたが五族協和王道建設の理想に燃える若者が陸続として渡満する時でした。

渡満して友人宅に落ち着いた折、友人から新天地で生活するには言葉を覚えなければと言われ、開講されている満鉄八幡町の講習所の満州語科と簿記科に人所願いを出したところ許可されたので入所した。満州語は漢字だけが発音はなかなか難しい。しかし、張先生は真に丁寧に指導され、初心者としては大変だが月日がたつにつれ慣れてくるので、満人に話しかけてみると、「不明白（ブミンバイ）」と言われてがっかりしたものです。

三か月ばかり友人宅にお世話になってから、言葉を覚えるにはと思い立ち日本人の少ないほとんどない城内のアパートに住み、辞書を片手に満人との会話に励み、そのかいあって言葉も少しずつ通ずるようになった。簿記も日系の先生の指導を受けて九月には講習を終了した。終了と同時に、語学をもっと研修するため錦州の日本生業株式会社就職したが、三か月後に生業栽培の主任技師が事故のため死亡したので大連の本社事務所で残務整理に従事し、翌十年四月南満州鉄道株式会社白城子建設事務所に就職した。これは日本生業の主任技師の友人の紹介である。

そして、測量隊に所属し北満の広野に鉄道建設の第一線で青春を思いきり走り回った。満州に渡る前に結婚し一児の父であった私は、渡満の折、妻子を妻の生家に託したのだった。

昭和十一年四月から満鉄、鉄道総局福祉生計所素倫分所に転属したのを機会に内地から妻子を呼び寄せた。そして、昭和十三年十一月同所から阿爾山分所主任に転出し、更に同十五年九月ノモンハン事変終了後同所齊々哈

爾(チチハル)支所経理科勤務となり、決算係主任として勤務中、昭和十九年六月一日応召し隠密動員のため家内のみ知らせ、齊々哈爾駅からひそかに東安省鄆徳の自動車隊に入隊した。

そして、ソ満国境の警備につき、昭和二十年二月新部隊編成と共に編入され南下した。応召の折には家族も女兒一人に男児三人と家内の五人家族であった。終戦の日昭和二十年八月十五日には、私の部隊は国境の街安東付近の山中に露営しており、部隊本部は安東の市街地にあつたので、早朝から異様な霧困気に包まれ本部との連絡もあわただしくなり、私も兵卒でしたが連絡要員として伝令として本部に集合した。正午過ぎ部隊長より、「本日正午陛下より終戦の詔勅が下された。各中隊長に報告し次の命令を待つよう。」命ぜられ、帰隊して報告した部隊は一時騒然とした。

当時満鉄の機構は日本人なしでは列車の運行は不可能な状況下にあつたので、進駐軍の指令により、満鉄社員を除隊と元の職場への復帰を命ぜられた。私も八月二十三日除隊となったが、通信網が破壊され連絡ができない

ので安東駅で待機していたところ、新京の日本人社員の家族を朝鮮に避難させて安東で待機していた調査役の保津さんと出会い、行動を共にすることになりほっとした。列車もいつ発車するかも分からないので待機していると、その日の午後三時ごろ奉天行きの列車が出るとのことなので、それで奉天に行くことにした。保津さんの家族は奉天の社宅におられた。

列車はその日の夕方安東駅を出発したが、ソ連の軍隊が進駐してくるとの噂で列車は名も知れない小駅で動かない。乗務員も赤い腕章をつけて右往左往している、異様な霧困気に包まれた。真っ暗な列車の中で保津さんと並んで目を閉じているうちに眠っていた。進駐軍の列車が通過するとの知らせで目が覚めたら奉天駅に近い駅に停車していた。轟音とともに軍の列車は通過し、その後私たちの列車は奉天に向け出発した。

夜も明け方近い何時ごろか分からないが、列車が止まったので車窓から外を見た。暗くてよく分からないが乗務員から車外に出ないよう注意があり、夜が明けるにつれ車窓から見えるのは駅内の小荷物をはじめすべての物が

散乱しており、遠くから聞こえる異様な叫喚は満人暴徒が人家や商店から略奪しているのだとのこと。また、街の随所に屍が転がり目を覆うばかりの惨状だ。

日もかなり高くなつたころ、日本人の警備の方々に導かれて駅前の旧奉天鉄道局舎に案内され、不安の中で食事のおにぎりをいただいて、落ち着くまで待機するよう申し渡された。しかし、保津さんの社宅は近くの青葉町にあるので行ってみようとのこと、やっとの思いで出掛けた。社宅に行つてノックすると男の声で、しかもロシア語のような声がある。保津さんはすぐ甥だと言われたのでほつとした。保津さんの家族は奥さんと娘さん二人と甥の五人家族で、私は当分お世話になることになつた。

甥の方は外語校のロシア語科出身なので意を強くした。奥さんも娘さんも皆断髪し男装していた。

私も家族のことが気になるので、日中は駅や機関区で避難列車が着くたびに消息を求めて尋ね歩くが、ある日、北満から来た開拓団の一団が着のみで、中には靴もないまま幼児の息絶えたのを背負つて来られたのに出会い、

その凄惨な姿に、戦争の悲惨さに涙も出ない悲しみだつた。

家族の行方が不明なまま十月のある日、齊々哈爾から生計所の上司である徳島經理課長が脱出されて奉天に帰られたことを聞き、家族が住んでおられる社宅を訪ねたところ、やっとなつて来たとのこと。齊々哈爾には八月十九日の午前中までは連絡があつたが、その後はだめになつたという。私の家族も元氣だが社宅の移動が激しく、移動の時は満人が待つていて持ち出せない家財等は全部持つていくので、できれば齊々哈爾に帰つてやるとよいと言われた。

私は取るものもとらずあえず、保津さんに厚くお礼を述べ徳島さんから金の都合もしていただいて、着衣を全部満式のものを取り替えて、機関区に行き機関車に乗せていただき、新京からハルビン經由か白城子經由か迷つたが、白城子勤務や索倫・阿爾山勤務の経験もあり、特に生計所勤務の折の満人社員で阿爾山在勤の機関区助役の張書田君を思い出し、白城子經由を決意した。新京で満人機関士に張助役のことを話したところ、張先生は今、

白城子機関段(区)の段長さんと教えられ、地獄で仏とはこのことと驚くと共に助かったと思った。そして、快く私の便乗を許してくれた。

普通だと七・八時間の距離だが二日ばかりで白城子駅に着き、機関段(区)に張段長を訪ね事情を話し、齊々哈爾の家族のもとに帰るのだと言ったところ、快く引き受けてくれ部下に命じて昂々深(コウコウケイ) 駅から齊々哈爾行き機関車で送るよう指示していただき、無事家族のもとに帰ることができた。

もともと張さんとの出会いは一袋の白麵の配給からであった。満人は仲秋節等はいよいよ白麵でぎょうざや麵を作りたいが、上等な麵は配給にはならないので何とかできないかとのこと。考えてみると日本人には上等な麵が配給されているのに、満人には劣る麵しか配給しない。よし、一袋配給するからみんなで分ける条件でよいかと念を押してやった。ただそれがきっかけだ。人の運命の分かれないなんて微妙なものと思う。

齊々哈爾の生活も、国民党軍と八路軍が入ったり出たりで大変だった。私の家族も社宅の度重なる移動で重い

物はほとんど失い、辛うじて生活していた。翌日から数少ない同僚を訪ねて今後の生活について話し合い、鉄路局の方々とも交渉して、旧生計所の店舗を借り受けて食料品の売店を始めることにしたり、煙草の葉を買い入れて紙巻き煙草を製造販売したりしたが、食べるのに精一杯だった。

その間、進駐してきたソ連兵の強制労働に狩り出されたりして苦勞の連続で、しかも、いつ帰国できるのかもども立たず、そして、満鉄在職中社内預金制度の身元保証金の名目で毎月の給料から天引きした金額も、一枚の身元保証金積立証明書を交付されただけで、更に子供らの将来の学資金や結婚準備金として保険に加入し、年二回のボーナスも保険金として納入してきた金も、満州国の大同生命保険会社なので全部だめになったし、日常の生活費を預金した郵政貯金も満州国崩壊と共に全部無くなった。日系の郵便貯金だと手段はあったのに残念だった。

苦しい生活が一年近く経た昭和二十一年八月、私どもにも帰国命令が出され、私は第二団に編入され八月中旬

の暑い日に、持ち物は自分の身につけている物と食料品リュック一個が認められただけで、預金通帳その他の証書類は検査で没収され、ようやく無蓋車で齊々哈爾を離れた。途中、国民党軍と八路军が大河を挟んで戦闘中のところを僅かの停戦時間に渡河しなければならず、子供三人と、外に一人は出発前に死亡したので骨箱を抱いてやっと渡河した。途中何回も列車が停車を繰り返して、その度に募金して列車を運行しながら新京に着き、一週間ぐら収容所生活の後、奉天でも収容所生活を繰り返して、十月中旬内地に向けての出発地胡呂島港に到着した。

ここでも度重なる検査が行われ内地帰還の手続きを済ませ、八月下旬、米国の上陸用舟艇LST一八〇屯に乗り組み、二十二日ごろかと思われるが胡呂島を出港した。岸壁を離れ港外に出た瞬間、昭和九年四月以来約十三年間苦勞して蓄積した全財産を失ったが、新しく故国での再出発を期し、苦しくそして厳しかった大陸での想い出を胸に、荒れ狂う玄海灘の波濤を乗り越えて進むLSTの艇内で、明日から始まる故国での生活に思いを巡らせていると、夢にまで見た懐かしい日本の山々が見えて

きた。上陸地佐世保港に入港し、検疫も済ませて上陸の第一歩を印した。そして、引き揚げ手続きを完了した後北陸經由の満員の引き揚げ列車に乗り組み、十月二十五日の早朝、羽前小松駅頭に降り立った。昨日金沢から電報を打ったがだれもいなかった。駅前の食堂で食事を済ませ、佐世保で支給された物資と満洲から持ち帰った物資を持ち、徒歩で生家に落ち着いた。

## 嗚呼満州

兵庫県 藤岡重司

——満州の終戦日一か月前より

引揚げまでの四四一日間の記録——

昭和二十年六月二十三日午後、関東軍司令部の兵事部（連隊区）に長谷川潔曹長を訪れた。

「よい悪いは別として、この大戦争の時代に生を受けた者として、兵隊の味を知らぬとあっては、歴史を語ることができない」「だから私も召集してくれ」と頼んだ。